

有栖山通信

一人の文士が二次元空間における病的恋愛思想を祖として織りなす純愛物語を近年秋葉原文化が到達した少女人物造形の精華の果てを近年進化したる軽量文芸形態への敬意と繋げ病みし情熱を以て筆を取り鍵盤を叩き電鼠を駆りて織り上げた怨念乃至は情念溢るる射干玉の如き小説也。

第一〇〇〇二十五号

有栖山葡萄



0

講堂の後部、二階に設置された調整室。

音声や照明をコントロールするこの部屋は放送部の領域で、そこに部員たち女子三人の全員が詰めていた。

彼女たちはガラス張りの窓から、講堂に並べられた椅子に座る人々を見下ろす。

前に新一年生、その後ろに左右に分かれて二・三年生、そしてさらに後ろが父兄席となっている。

「今年も誰かいるといいわね」

「そうだねえ、去年は一人居てくれたし」

赤い三年を示す校章をした香織と真尋が、調整卓の前に座り話している。

「正直、居てくれないと困るんですけどね」

そのため息混じりに言ったのは、すこし後ろの椅子に座っていた青い二年の校章をした千鶴子だった。

「使いつ走りがほしいって？」

「それもありますけど、うちの部で三人は辛いですよ」

真尋が振り返り意地悪そうな笑いでいじってくるのを、彼女は疲れた笑顔で返す。

「そうかしら、私たちが二年の時二人でしたよ」

滑らかに指を動かしフェーダーをいじりながら、さらりと言つてのける香織に、千鶴子は「はあ」とため息をついた。

「先輩たちは特別なんです。こんなに体育会系みたいな体力勝負だとは思ってませんでしたよ」

「確かにそれもそうかもしれないわね」

「それにあんな事させられるなんて、聞いてませんでしたから」

「そうね。そつちの意味でも特別ですね、うちの部は」

香織の意味ありげな笑いに、千鶴子は頷く。

「だよねえ、だからこそ居てくれなきゃ困るんだよね」

真尋が並ぶ生徒たちをざっと流し見る。そして時計を見ると視線をステージ脇の生徒会役員に視線を向ける。

相手が小さく手を上げるのを見て、真尋も答えるように手を上げ頷く。

「さて、始まるよ。準備はオッケー？」

「いつでも良いわ」

「んじやスタートっ」

真尋の合図に、香織が卓を操作する。

室内の照明が暗くなつていき、静かに音楽が流れ出す。

少しざわついていた講堂は、それが合図であったかのように落ち着いていく。

「これより、椎堂学園中等部入学式を始めます」

そしてタイミングを見計らつて、司会の生徒会役員の声が講堂に響いた。

「さて、しっかり探しましょうね」

香織の目が怪しく光った。

今日は入学式、これから新しい生活が始まる。

「上機嫌だね」

横に並び一緒に学校へと向かう幼なじみに、彼は声をかけた。

彼女——霞^か乃は立ち止まりじつと彼のことを見つめた。

彼も立ち止まり彼女を見つめる。

「制服似合ってるって、褒めてくれたから」

照れくさそうにしている彼女に、彼が優しく微笑み返す。

彼女が上機嫌だと、彼も幸せな気分になれた。

「本当に似合ってるよ」

「ありがとう」

照れくさくなつたのか、小さな声で答えると霞乃はふいつと視線を外し足早に先に歩き出す。彼女が照れているのが判っている彼は、なにも言わず彼女に追いつきそつと手のひらを後ろにして差します。それを霞乃は慣れた仕事で、指を擽めて手を繋いだ。

(中略)

同じクラスになつた霞乃と二人で校門の掲示板からそのまま指示通り講堂に向かった。

「席は自由みたいだし、適当に座ろうか」

二人はあまり目立ちそうにない中側の空いている席を選んで座る。しばらく二人で話していると、周りの雰囲気からほとん

どの人が揃っているのを感じた。

すると場内の照明が消え、静かな音楽が流れる。

「これより、椎堂学園中等部入学式を始めます」

ステージ脇に立っていた生徒が司会として進行を始めた。

式はたぶんありきたりの物なのだろう。

しかし時折何度か聞こえる声のようなノイズのような音に、彼は妙な違和感を感じていた。

「どうかしたの?」

「いや、平気だよ」

妙にそわそわとする彼に霞乃が耳元でささやくようにきいてきた。しかし彼はなんでもないと答える。霞乃も周りの人も、その音に気がついていない様子ではなかった。

(新入生は振り返って後ろの壁のガラスを見ましよう)

今度ははつきりと聞こえた。

彼は振り返ってガラスを見た。そのガラス越しに人影が三つ、手を振っているように見えた。

「急に振り返って、どうしたの?」

霞乃が小声で彼の袖を引っ張る。

「えっ、だつていま……」

彼が驚いて視線を戻すと、誰一人振り返っている生徒は居なかった。一体なにが起きているのか彼には判らなかつた。

「いや、ごめんね。なんでもないよ」

彼は霞乃に心配かけないように、そつと手を握つた。

いつもの戯言

はじめましてとおひさしがり、今日は御立寄りいただきありがとうございます(語尾)。

「有栖山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋にございます(語尾)。

適当に流行の語尾をつけてお読みください。たりきーほんがんー！

きっとなにものにもなれない自分は人様に頼るしかないのですよ！

ちなみにオルコッ党な私は「ですわっ」あたりを推奨しますw脳内ゆかなさん再生で。

ってことで、2011ねんなつのコミケ！

無事に「君望 NovelSeries」13作目新刊を出すことができました。

が、が、しかし！！

みなさんもご存じの通り、2011年は「君が望む永遠 発売10周年」！！！！

そんな記念の年で通常運行の小説というのは、ちょっとがんばりが足りなかったかなと。

でも、冬コミも10周年には違いない。ということで冬もがんばるのです！！！！

上げつない遠を、そして苦悩する水月の活躍にご期待ください(何

有栖山公園はこんなですが、君望サークルとしてやっていきますよ！

お、通常運行じゃない。今回は素敵カラー表紙がついているのでした！！

君望がきっかけで出会った魂の弟まりりん@SSB 謹製の表紙絵！

「10周年だからたまには仲良くねっ」とテーマだきゅうです……うん、さすが。

さて、ヤンデレ読者の皆さまに。

ヤンデレアンソロジー「属性 y d シリーズ」

諸般の事情により発行が止まっていますが、また新作を出したいとは思っています。

虎視眈々と準備はしていませんが、動けるようになったら一気にやりますので気長に気長にお待ちくださいませ！

次回イベント予定は、冬コミ。

オンリー等は自分で開催しない限りなさきゅうですわね。

今回も短編をつけてみました、お楽しみいただければ幸いです。

これ、小説と言うよりもこれから書く奴のプロットですわね

ということで次回作もご期待くださいませ。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

2011年暑い日 有栖山葡萄様

2011年8月14日 発行

発行所

ありすやまこうえん
有栖山公園

<http://www.aliceyama.jp/>

budou@aliceyama.jp